九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

子どもによる授業分析の研究 : 分析方法の開発と分析視点の析出を中心に

清水, 良彦

https://doi.org/10.15017/1441010

出版情報：九州大学, 2013, 博士（教育学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：全文ファイル公表済

（様式３）

氏　　名　：　清　水　良　彦

論文題名　：　子どもによる授業分析の研究―分析方法の開発と分析視点の析出を中心に―

区　　分　：　甲

論　文　内　容　の　要　旨

本稿では、重松鷹泰以来の「授業分析」（重松 1961）の方法を参照しつつ、その発展に資する授業分析方法の提案を行う。授業分析においては、学校現場における授業研究を協力的・累積的にするために「すべての人々の納得しうる事実の上に立つ」（重松 1961:28）ことが求められている。そのため、授業分析は逐語記録を中心とした授業における教師、子どもの客観的な授業記録を重視する。また、授業分析は特定の理論や仮説に依拠し、それを検証するのではなく「現場における実践の事実をありのままにとらえること」（重松 1963:23）によって行われる。しかし、現実には授業のあらゆる全ての事実を把握することは不可能であり、実際はその時点で捉えることのできる授業の事実をもとにして授業分析を実施しつつ、常に「事実がもつ発展の可能性について新しい意味の発見」（小川 1971）に努めるとともに、「授業の新しい事実」（柴田 2007）に開かれていることが求められる。これらの課題に応えるために、これまでの授業分析研究においては記録された授業の事実の意味を捉えるための授業分析手法が開発されてきた。それに対して、本研究では新たな参加主体として、学習者である子どもに着目し、子どもが参加する授業分析方法、「子どもによる授業分析」を構想する。本研究の目的は、「子どもによる授業分析」によって授業の新たな事実を把握することが可能になるのかを明らかにすること、子どもはどのように授業の事実の意味を解釈・検討するのか、子どもの授業分析視点を明らかにすること、「子どもによる授業分析」の意義を明らかにすることの三点である。

第１章及び第２章では、授業分析方法、授業分析視点研究のレビューと「子どもによる授業分析」方法の開発を行った。従来の授業分析方法では、授業記録に含まれる①授業の基本情報、②教師の指導、③子どもの反応のうち、③子どもの反応を十分に記録することが困難であるという授業記録の限界がある。また、八田(1963)らによって提示されてきた授業分析視点は、授業者・現場教師・研究者の視点に限定されたものであった。これらを踏まえ、学習者である子どもが参加する「子どもによる授業分析」の手順を考案し、子どもが使用する「授業分析シート」を作成した。第３章では、第２章で開発した「子どもによる授業分析」を実施した。「子どもによる授業分析」はW市立東小学校で行い、2009 年度に 2 回（第 5 学年）、2010 年度に 1 回（第 6 学年）、2011 年度に 2 回（第 6 学年）の計 5 回実施した。

第 4 章では「子どもによる授業分析」によって得られた子どもの記述データに対して、定性的コーディングによる分析を行った。その結果、子どもの授業分析視点として、授業に対する「内在的視点」と「外在的視点」の２つが析出された。授業に対する「内在的視点」は授業を当事者的・再経験的に検討する視点であり、5 の小視点を含んでいる。一方、授業に対する「外在的視点」は授業を俯瞰的・メタ認知的に解釈・分析する視点であり、10 の小視点を含んでいる。さらに、八田の「分析視点群」との比較から授業を当事者的に振り返る子どもの授業分析視点の特徴を明らかにした。

第 5 章では、「子どもによる授業分析」の検討を行った。まず、「子どもによる授業分析」プロセスについて、「発表」場面に焦点を当て子どもの発表スタイルを析出するとともに、「発言表」（中村 1986）を使用した分析を行った。また、授業者及び子どもを対象とした半構造的インタビューの分析から、「子

どもによる授業分析」の意義として、子どもの再学習、自己変容という教育的意味と、授業づくりへの活用、授業観・子ども理解の深化という研究的意味を明らかにした。そのほか、「子どもによる授業分析」方法について、授業記録の作成方法、授業記録の種類・様式、授業分析シートの形式、授業分析方法の４点から課題を指摘した。

以上の検討を通じ明らかとなった本研究の成果は三点ある。第一に、「子どもによる授業分析」によって、子どもが把握している授業の事実を捉えることが可能となった。「子どもによる授業分析」によって得られた子どもの記述は、教材（授業のテーマ）や級友の意見に対する子どもの考え、或いは子どもの授業観や子ども理解が表現されたものであり、従来の参加主体では把握することができない授業の事実である。子どもによる授業分析は、従来の授業分析では把握することが不可能であった授業の事実を捉えることを可能とし、「実践に耐えうる理論（すなわち現実と遊離しない理論）」（柴田 2013）を構築するという授業分析の教育学的意義を高めると考えられる。

第二に、従来の授業分析にはない、新たな授業分析視点を析出することができた。記述の通り、本研究では、子どもの授業分析視点として、授業を再経験的・当事者的に検討する「内在的視点」と授業を俯瞰的・メタ認知的に解釈・分析する「外在的視点」の２つを析出した。子どもが当事者としての立場から授業を検討する「内在的視点」と「外在的視点」の一部は、子ども特有の授業分析視点である。「子どもによる授業分析」は、当事者的な視点から授業の事実の意味を捉え直すことを可能とし、授業実践に新たな意味を付与するという教育方法学的意義を有すると考えられる。

第三に、本研究では「子どもによる授業分析」の意義を明らかにした。子どもにとって、教材（授業のテーマ）に関して「再学習」を行うことで自分の考えが更新される、よりよい学習者として「自己変容」いくための契機となる、という教育的意味を明らかにした。また、教師にとって、子どもの「内在的視点」を「授業づくり」へ活用できる、子どもの「外在的視点」に触れることで教師自身の「授業観・子ども理解の深化」につながる、という研究的意味を明らかにした。このことから、子どもによる授業分析は教師や子どもにとって実践的価値を有すると結論づけられる。